

氏名	杉田理恵子
学位の種類	博士(比較文明学)
報告番号	甲第528号
学位授与年月日	2020年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	人間的生からみた助産—コンヴィヴィアルな出産のために
審査委員	(主査) 佐々木一也(立教大学大学院文学研究科教授) 福嶋 亮大(立教大学大学院文学研究科准教授) 西谷 修(東京外国語大学名誉教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序論

第1章 出産の本質と助産の人間学的意義

1.0 出産と出生の重層的意義

1.1 出産による人間の基本的構造～「生む」ことと「生まれる」こと～

1.1.1 出生の原理

1.1.2 「生む」「生まれる」の関係～母と子～

1.1.3 社会的意義～父と子の間を結ぶ～

1.1.4 制度的意義～母と父の間に生まれる人間～

1.1.7 出産の人間学的意義

1.2 助産の構造と助産師のアイデンティティ

1.2.1 自然(physis)と正常(Normal)の間

1.2.4 助産師のまなざし

第2章 イリイチの医療批判における人間的な生

2.1 イリイチが現し出す人間的な生

2.1.1 イリイチ思想の形成

2.1.3 産業批判と Conviviality

2.2 医療批判とその位置づけ

2.2.2 産業化した医療と医原病

2.3 キリスト教制度批判と人間的な生

2.4 終焉に向かう産業社会とイリイチ思想の展開

2.5 イリイチが問いかけるもの

第3章 社会的人間の「生」と出産と助産

3.1 人間の社会化

3.1.1 近代社会と人間の身体化

3.1.2 社会の身体化と医療体制の構築

3.2 社会的出産と助産の技術化

3.3 産婆から助産婦へ

3.4 淘汰される助産

3.5 出産と助産のヴァナキュラーな場所

第4章 出産と助産の Conviviality

4.1 助産技術再考

4.2 助産における共一出現

4.3 Conviviality のために

引用参考文献

(2) 論文の内容要旨

本論文は助産師として出産現場に立ち会う著者が、近代化された出産過程が人間性を奪いつつある現状に危機感を持ち、イヴァン・イリイチ(1926-2002)の医療批判に共鳴しつつ、自らの目指す助産のあり方を考究したものである。

序章で、出産は一人の人間が「生まれ」社会がそれを受容するという人間の「共同性」の結びめであり、人間の「共存在」の証だと見る。しかし現代では医療技術化された出産が効率と安全を最優先し、助産を補助的役割に組み込むことによって、共存在とその結果の人間の社会化を困難にしているとの問題意識が開陳される。

第1章では、出産の人間学的意味を考究し、助産師が介在することで母子の関係は共同相互存在に高まるとされる。母子は分娩によってそれぞれ個として分離はするが、第三者の介在により共同存在を構築するのだ。助産とは産婦と新生児の持つ本来の力の発揮を促す役割であり、人間存在そのものの発現を支援する。助産は物理的身体に係る医療でなく人間の共同存在性を証する行為である。この助産の意味を歴史的に辿ることによって、長い間親子関係を結びつける重要な役割を期待されてきたことを明らかにする。その上で、現代では生産性の観点から効率が重視され、助産の役割が変化していることを確認する。

第2章では、上記の問題の根源を探るべくイリイチによる医療の批判的分析を参照する。イリイチは道具化する社会における医療の産業化批判の軸にコンヴィヴィアリティを置いた。イリイチによれば産業化は医療を病や死といった本来人間の共同相互存在にとって不可欠なものを「煩わしさ」「厄介」と捉え、それを技術的に克服することを目指し、その結果医原病を惹き起こす。それに対する対処はコンヴィヴィアリティである。著者はこの概念を使って、病ではないが人間の共同相互存在にとって不可欠であるにもかかわらず医療化、産業化される出産の人間学的捉え直しに向かう。

第3章では、イリイチの医療批判を補助線にして、出産と助産が社会の要請に応じて単なる生産の場が変わり、本来の生々しい命との関係、他者との共同相互存在構築力を失ってしまった経緯を追う。近代化とともに助産は家族形成と同時に国家再生産の役割を負う道具になった。助産師と産婦の人間関係は診療という身体的関係に変質し、出産での人間的共同性の産出を困難にした。明治以降の近代的助産教育は既に戦前に伝統的産婆術と医師の下での助産技術の分断を生み、前者を淘汰した。戦後「産婆」名称が「助産師」に統一され、看護師資格が必須となることによって、出産が産科看護師の仕事に移行し、出産は科学技術的に制御され、安全で安楽になった。医療保険など社会制度もそれを後押しした。だがその結果、出産環境への不満、育児ノイローゼ、マタニティブルー、夫婦の産後クライシスなどの人間的問題が顕在化するようになった。

第4章では、人間の共同相互存在を生み出し支えてきた助産の回復への道が論じられる。これらの経緯を経た今、助産は産業社会発展のためでなく、医療化のために傷つけられてきた母子を癒す技術として機能しなければならない。そのためには出産を人間の複数性あるいは共同性とその世界と一緒に出現する、言い換えると「共一出現」するヴァナキュラー(それぞれの個人に固有)な場にしなければならない。それが出産をイリイチの言う意味でコンヴィヴィアルなものにし、人間本来の親子関係や夫婦関係を結ぶことを可能にする。出産の場のコンヴィヴィアリティの創出が肝要である。そのためには、助産師が助産所、病院、地域の母子保健など多角的な経験を積める教育や、妊娠期から育児期まで一貫して見る受け持ち助産師制度、女性と助産師の多様な接触連繋の場の創出など、医療から独立した助産制度の整備が必要となる。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文の著者は、その経歴にも見られるとおり、現役の助産師であり、勤務する助産師養成校において学生たちの助産の実習を現場で指導している。その現場での経験に基づき、現在の出産は産業社会の効率主義に取り込まれ、個人としての営みである以上に社会的あるいは国家的営みとして行われていることが妊婦や産婦、さらには母親を精神的に追い込み、ひいては子育てや親子関係、夫婦関係をも危機に陥れる事態を生んでいると考えるに至った。本論はこの問題の解決に向けてイリイチの哲学的思想を補助線にして道筋を立てようと試みた意欲作である。

(2) 論文の評価

本論文は以下の点で高く評価される。

①現場の経験に立ち、その成果を現場の活動に役立てようとしていること。

本論は出産の現場に立ち会い、出産前後の事象とその後の親子関係、家族関係の推移を具に見守ってきた著者ならではの経験に基づく論考である。従って、本論は理論としての機能はもちろん、自らや同僚の助産師たちの実践の指針となるべく書かれたものである。それゆえに、現代の医療化した出産現場の在り方に疑問を持つ助産師たちにとって、自分の立場を明確にし、先に進む道筋を示す知見に満ちていて大いに有用である。

②産科医療の場に置かれた出産の人文的意義を追求していること。

出産については看護医療の科学技術の世界で人文的意味が問われることがほとんどない。著者はそれを「人間学的意義」という。それは哲学的には「存在論的」といってよいのだが、人間存在の具体相に即しているので著者は「人間学的」と規定する。医療技術は本来病気でなく多くの出産を「異常」に仕分けし、科学的「安全」だけを重視する。これが人間の共同相互存在を生み出す営みを傷つけていることに著者は警鐘を鳴らす。それをイリイチのコンヴィヴィアリティ概念を用いて見事に説明している。本論文は出産に人間学的観点から切り込んだ貴重な研究である。

③出産を生まれる側の立場からも見ていること。

出産は生む側および生ませる側(医療者、父親、男性)の側から見られて処理される。生む側も産業社会に馴染み、安全、安心な出産に心がける。生まれる胎児についてもその科学的安全性だけが留意される。本研究は胎児も可能的共同相互存在としての人間として扱い、それが現実化する出来事としての出産の意味を明らかにした。そして、これがコンヴィヴィアルな助産を介してのみ可能であることも明らかにした。これは著者の独自の観点として評価できる。

④日本の助産制度の近代化に新たな評価を加えている。

明治期以来の助産制度の変化を江戸時代以前の産婆の仕事と比較して評価するだけでなく、コンヴィヴィアリティの観点から両者の持つ人間学的意義の違いを明らかにしている。そして、産婆の仕事が現状の制度に対する人間学的評価を踏まえて、共同相互存在としての人間の誕生を可能にする出産のあり方の原型としての意味を提示した。

なお課題があるとすれば、この考え方を現代において具現化する制度設計のために医療従事者やその下に組み込まれた助産師の考え方を変える工夫だろう。これはさらに哲学的研究を深めることで得られると思われる。よって、出産の人間学的研究という新しい手法を導入しその意義と可能性を明らかにした本論文は、比較文明学として優れた研究業績と認められる。